



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 66

July 4, 2017

目次

Invitation	2
第35回有機地球化学シンポジウム 池原実	
Information	5
日本有機地球化学会 2018・2019年度役員選挙のご案内 柏山 祐一郎	
People	7
再始動! 力石嘉人	
Overseas Report	11
シチリア島海外巡検報告 伊佐治雄太	
Announcement	13
ROG33 巻へ論文を投稿しましょう!! 年会費納入のお願い	
編集後記	15

Invitation

第 35 回有機地球化学シンポジウム (2017 年高知シンポジウム) ファーストサーキュラー

代表世話人：池原実（高知大学）

会員の皆様

新緑の候、会員の皆様には益々御清栄の事とお喜び申し上げます。第 35 回有機地球化学シンポジウムは高知大学が世話人となり、8 月 29 日（火）～8 月 31 日（木）に高知県立大学を主会場として開催します。多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。なお、2017 年高知シンポジウムのホームページを開設しました。最新の情報はホームページでご確認ください。

高知シンポ URL：<http://www.kochi-u.ac.jp/marine-core/kochisympo2017/organic/top.html>

1. 日程

8 月 29 日（火）：運営委員会

8 月 30 日（水）：講演会、ポスター発表、総会および懇親会

8 月 31 日（木）：講演会、高知コアセンター見学会（予定）

2. 会場

運営委員会：高知県立大学（永国寺キャンパス）教育研究棟 1 F A106 教室

講演会、総会：高知県立大学（永国寺キャンパス）教育研究棟 1 F A101 教室

ポスター発表：高知県立大学（永国寺キャンパス）教育研究棟 1 F A106 教室

懇親会：（高知市内予定）

高知コアセンター見学会：高知大学（物部キャンパス）海洋コア総合研究センター

高知県立大学（永国寺キャンパス）高知県高知市永国寺町 2 番 22 号

（アクセス情報 <http://www.u-kochi.ac.jp/soshiki/1/access-eikokuji.html>）

高知大学海洋コア総合研究センター 高知県南国市物部乙 200

（アクセス情報 <http://www.kochi-u.ac.jp/marine-core/inquiry/index.html>）

3. 開催までのスケジュール

6/12（月）参加・講演・懇親会の申込開始

7/24（金）参加・講演・懇親会の申込締切

7/31（月）セカンドサーキュラー（講演スケジュール等）

8/7（月）講演要旨締切

4. 参加・講演・懇親会の申込（登録）

上記の申込日までに登録をお願い致します。

参加申込書を高知シンポ HP からダウンロードして、必要事項を記入し、電子メールにて高知シンポジウム受付アドレスまでお送り下さい。また、参加申込書などの郵送での受け付けも可能です（できる限りメールで頂ければ幸いです）。

高知シンポジウム受付メールアドレス：kochisympo2017@gmail.com

5. 問い合わせ先

池原実 (IKEHARA, Minoru)

〒783-8502 高知県南国市物部乙 200

高知大学海洋コア総合研究センター

(TEL) 088-864-6719

(E-mail) ikehara@kochi-u.ac.jp

6. 宿泊

宿泊は各自でご予約下さい。高知県立大学がある高知市街には多数の宿泊施設がございます。

7. 発表形態

口頭とポスターで行います。

1) 口頭発表時間は1件あたり質疑応答も含め15分を予定しています(発表件数によっては発表時間に変更になることもありますので、セカンドサーキュラーでご確認ください)。口頭発表では、液晶プロジェクターを使用します。USBメモリ等でご持参いただき講演当日の朝・休憩時間・昼休み等に会場のPC(Windows1台、Mac1台)にコピーして下さい。ご自分のPCを使用ご希望の方は事前にご相談ください。

2) ポスター発表は、A0サイズ(縦84cm×横120cm)を推奨いたします。会場に展示用パネル(縦90cm×横120cm)を用意しますので、パネルに貼れるものであればどのような形でも結構です。2017年度も学生参加者には「最優秀ポスター賞」を設けて、賞状・副賞等を進呈する予定です。なお、会場のスペースの関係上、発表形態の変更をお願いさせていただくこともありますので、お含みおき下さい。

8. 講演要旨

口頭発表、ポスター発表とも1件につきA4版1ページのPDFファイルで作成してください。原則として電子メール添付でkochisympo2017@gmail.comへご送付ください。メールタイトルに【高知シンポ要旨】と明記してください。

様式は下記のとおりです。過去のシンポジウム要旨集を参考にしてください。

余白:上下30mm、左右20mm程度、行数36行程度、文字の大きさ11ポイント程度、1-2行目はタイトルと発表者氏名(センタリング、発表者の氏名の前に○、連名は・で区切り、所属は名前の後にカッコ書)、3-4行目は英文タイトル・氏名・所属を記入。

講演要旨テンプレートは、高知シンポ HP からダウンロードできます。ご利用下さい。

9. 参加費・懇親会費

シンポジウム受付でお支払い願います。以下の金額は予定であり、正式にはセカンドサーキュラーにてご案内致します。

- ・参加費（講演要旨含）：正会員 2,000 円、学生会員 1,000 円（非会員：一般 4,000 円、学生 2,000 円）
- ・懇親会費：一般 5,500 円、学生 4,000 円（予定）

10. 高知シンポジウム実行委員会

池原実（高知大学）、井尻暁（海洋研究開発機構）、一色健司（高知県立大学：非会員）

11. その他

シンポジウム中の企画・会合や企業展示等をご希望の方は世話人または本学会事務局までご連絡ください。

以上



高知コアセンターに保管されているコア試料



高知コアセンターの外観



高知城

Information

日本有機地球化学会 2018・2019 年度役員選挙のご案内

2018・2019 年度役員選挙 選挙管理委員会 委員長 柏山 祐一郎

本会会則第 10 条および選挙細則により、2018・2019 年度役員選挙を以下の日程で行います。

立候補・推薦受付：7 月 14 日 必着

投票期間：7 月 24 日～8 月 18 日

開票：8 月下旬

選挙結果報告（総会）：8 月 29 日

つきましては、下記要領で会長・副会長・監事・運営委員に対して、それぞれ立候補または推薦の届け出をしていただくようお願いします。

1. 会長 1 名、副会長 1 名、監事 1 名、運営委員 10 名を選出します。
2. 立候補者または推薦者は、下記フォームに記入の上、選挙管理委員会宛に届け出てください。
* 推薦者は候補者の承諾を受けてから推薦してください。
3. 届け出の締め切りは 7 月 14 日(金)必着です。
4. 選挙管理委員会の所在地・連絡先は次のとおりです。

〒910-8505

福井市学園 3 丁目 6-1

福井工業大学 環境情報学部 環境・食品化学科

柏山 祐一郎

TEL: 0776-29-2686

E-mail: jaog.election.2018@gmail.com (@を半角に変えてください)

< 会長／副会長／監事／運営委員 立候補／推薦 届 >

候補者氏名：

所属機関：

推薦者氏名：

2017年 月 日（届出日）

2017年度日本有機地球化学会選挙管理委員会

柏山 祐一郎 委員長

山本 真也

金子 雅紀

People

今回の People は、北海道大学の低温科学研究所に教授として着任された力石嘉人さんに、今後ご自身が目指すサイエンスに関する記事をご寄稿いただきました。

再始動！

北海道大学 低温科学研究所
力石嘉人

ご無沙汰しております。昨年9月に北大・低温研に異動しました、力石嘉人（チカライシ ヨシト）です。はじめに、学生時代から今日まで、常に暖かく、厳しく、そして優しく支えて下さった日本有機地球化学会の皆様に、心より深く深く感謝いたします。皆様の多大なる支援のおかげで、伝統ある北大・低温研で職を得て、働くことができるようになりました。名前をあげればキリがありませんが、とくに、我が大恩師 奈良岡浩先生（九州大学・教授）と兄弟弟子 大場康弘 北大低温研・助教、金子雅紀 産総研・主任研究員、そして、JAMSTEC の大河内直彦 分野長、小川奈々子 主任技術研究員、高野淑識 主任研究員、Nevada 州立大学 Reno 校の Simon R. Poulson 教授には、公私にわたり、大変、大変、大変、大変お世話になりました。なかなか面と向かっては言えませんが、皆様の全てに 10,000% の感謝をしています。また、この数年間においては、Wisconsin 大学 Madison 校の Shawn A. Steffan 助教、Prarthana S. Dharampal 博士研究員、我が研究室の博士課程学生 滝沢侑子さんと、私の4人で、お互いの長所を活かし、短所を補いながら、多くの議論を重ね、質の高い研究を「チーム」として展開できた（できるようになった）ことは、今、私が北大・低温研で研究と教育を行うにあたり、相当に大きな自信とパワーになっています。そして、どういう繋がりかは全く覚えていませんが、有機地球化学会内外で、超ナマイキ、かつ、世間知らずな私を、常に厳しく（優しく？）諭し、ともに歩んでいただいた北海道大学 沢田健准教授に、非常に大きな恩を感じています。皆様、本当に、本当にありがとうございます。これまで、皆様にご指導いただいた多くのことを、そして共に学んだ多くのことを糧に、北大・低温研で新たな第一歩を踏み出します（踏み出しました）ので、今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。

私の研究には、常に、「有機化合物」と「安定

同位体比」という2つのキーワードがあります。そして、「有機化合物の安定同位体比の知識と測定技術（開発と運用）を手段として、身近な自然に存在する様々な paradox を1つ1つ確実に解き明かしていくこと」が、私の研究スタイルです。有機化合物の安定同位体比には、

(1) 地球上の物理化学、生化学反応の基質、経路、フラックスに対して定量的に変化する
<補足1>

「 $AxX \rightleftharpoons AyY$ 」の同位体平衡は、

$$\ln \alpha_{(AxX-AyY)} = \frac{1}{24} \left(\frac{hc}{kT} \right) \frac{\Delta m_A}{m_A m_{A'}} \times \Delta \alpha_A$$

<補足2>

化学反応におけるレイリー同位体分別は、

$$\delta_{t=x} = (1000 + \delta_{t=0}) \times F^{(\alpha-1)} - 1000$$

(2) この基本原理が個々の反応スケールの研究から地球化学、地質学スケールの研究まで共通の一般則として広く適用できる

という2つの性質があります。すなわち、研究目的に合わせて、有機化合物の同位体比を「うまく」使うことができれば、そこには、自然界で起こる様々な現象の 5W2H (Who, What, Why, Where, When, How, How many) を、優れた精度で「定量的」に理解できる可能性があります。この「可能性」に挑戦できるおもしろさと楽しさが、私の研究を支える重要なモチベーションの1つであり、私は、それを共同研究者や学生達と共有したいと考えています。

北大・低温研では、この研究スタイルを維持しつつ、よりアタマを柔軟に使って、よりサイエンスの本質に迫れる研究を展開していきたいと考えています。そして、低温研、北大、日本、そして、世界のサイエンスの発展に、貢献したいと思っています。

具体的には、まず「地球の生物圏における有機化合物の合成、移動、分解（消費）、再合成などの情報が、安定同位体比にどのように記録さ

れているのか」を本質的に理解し、そして、得られた同位体科学的な知見を担保にして、地球表層の物質循環、とくに、「太陽から供給されたエネルギーが、どのように固定（保存）され、移動し、消費されていくのか」を、個々の生物の中で、あるいは1対の生物-生物（生物間相互作用）の間で、そして群としての生態系の間で、より正しく（定量的に）評価したいと考えています。

自然界の生物や生態系は、絶えず環境の「不均一性（例えば、季節変化、よそ者の侵入、飢餓、その結果としての活動量の大小）」に曝されながらも、一見すると、常に「安定的（普遍的、恒常的、持続可能的）」に存在しているように見えます。しかし、そのように「安定的」に見える生物や生態系も、ほんの小さな小さな綻びによって、一瞬にして死滅し、崩壊するという「脆さ」を、同様に持っています。そして、その中で生物は「進化」しています。この「安定的」vs.「脆さ」は、どのように説明でき、いつ、どこで、どうやって、存在しうるのでしょうか？そこに「進化」はどのように関わっているのでしょうか？・・・私は、それはおそらく、生命、系の維持において、限られたエネルギーをうまく利用している故、と考えています。すなわち、生命単体としてみれば、エネルギーの収支（InputとOutput）が成立しているから、系としてみれば、寄生（parasitism）も含めて、常に「Trade Off」, 「Give & Take」, 「Even & Even」の共利共生（mutualism）が成立しているから、「安定的」であり、一方で、そのバランスが許容範囲を越えて崩れてしまうと、「脆さ」が勝って安定が崩壊してしまうのだと思います。「Even & Win」の片利共生（commensalism）or片害共生（amensalism）や「Win & Win」の関係などは、元々エネルギー的にありえず、また一方で、「進化」とは、「脆さ」面のリスクをもたらす「不均一性」に対する、新たな「安定的、持続可能的」な解（場）の獲得手段なのではないかと考えています。これは、どことなく、研究室の運営、教員と学生の関係、論文の質と量、研究資金の獲得、共同研究ができるか、できないか、研究における戦略的な取捨選択、などにも通じているような気がして、興味深く面白いのですが・・・まずは、自然界の生物や生態系の「安定的」vs.「脆さ」、そして「進化」の疑問について、「身近な自然」から得た試料や、それらを研究室で飼育、培養した試料、そして、それらの試料に含まれる「有機化合物の安定同位体比」を使って、定量的に理解したいと考えています。

教育に関しては、「有機地球化学」の研究を、将来にわたって継続的にできるような人材の育成に力を尽くしたいと考えています。「何も知らない若造が何を！」と感じるかもしれませんが、,,, 私は、複数の研究者でチームを作り、

1. よく議論する
 2. 研究の柱になる技術を持つ
 3. 質の高い（貢献度の高い）研究を目指す
 4. 質の高い発表（プレゼン、論文）を目指す
- ことの大切さを、ここ北大・低温研で、学生と共に学び、実践していきたいと考えています。

1つ目の「よく議論する」は、4つの中で最も大切なこと、と思います。我々は、多くのケースで、自分の意見が正しいかどうかを主張し合い、自分に（もしくは、自分の過去の研究成果に）とって都合の良い意見（感情）に基づいて、賛成か、反対かの白黒をつけたがり、相手を論破することが議論だと思っている節があります。しかし、研究チームとして質の高いサイエンスを行ううえで、「論破」はあまり意味が無く、それよりは、「自分達の発見、仮説、その証明、発表」の全てのプロセスにおいて、

- (1) どんな背景（background）、展望（Vision）、潜在的可能性（Implication）があるのか？
- (2) どんな目的、課題があり、どのようなデータが得られたのか？
- (3) そのデータから読める事実は何か？
- (4) 事実と意見（予測、希望）は、しっかりと区別できているか？

に関して、常に「5W2H」を意識して、じっくりと話し合い、お互いの意見の差（ Δ ）を小さくしていくサイクルが、「よく議論する」ことなのだと思います。そして、我々は、この「よく議論する」によって、多くの研究者が認めることができる、もしくは、納得できる「真実」に近づくことができるのだと思います。議論を重ねて、「真実に到達すること」は、サイエンスの本質であり、同時にとても「おもしろい（Interesting）、楽しい（Exciting）」部分です。学生に、「Chikaraiishi et al., 20xx に書かれていることは、根本的に間違っていると思うのですが・・・」とか、「この教科書に書かれている説明では、私のデータは全く説明できません」と尋ねられれば、そのような「差（ Δ ）」にワクワクしますし、積極的に議論をして（「差（ Δ ）」を小さくして）、どんどん真実に近づきたいと思っています。

2つ目には、「研究の柱になる技術を持つ」が、やはり重要だと思います。おそらく、この20年間、研究者を評価する指標としての「論文の量（数）」が過度に重視され、その1つの対策として、「技術は他人に任せて、どんどんデータを出

し、論文数を稼ぐ」といった傾向が強くなってきているように思います。実際、有機化合物の安定同位体比の測定に限らず、議論に耐えうる（質の高い？優れた精度の？）データを得るための技術は、一朝一夕では身につけられないことが多く、限られた時間で一定の成果（業績）を出すためには、もしくは、高度な研究課題にトライするためには、必要な技術全てを個人で持つことは現実的ではありません。一方で、「見たいモノを見るため」の技術力の存在は、常に研究を進める「大きな力、欠かせないモノ」であることも事実です。それゆえ、私は、例えば、私がある技術を持ち、チーム内の別の研究者が別の技術を持つというように、お互いに「Give & Take」の関係を構築し、複数の技術をチームで共有することが、1つの理想だと考えています。そして、そのためには、まず、私は、ここ北大・低温研で、有機化合物の安定同位体比の測定技術をキッチリと維持し、また同時に、世代を超えて「安定的（持続可能的）」にこの技術が使えるように、技術を持つ研究者を育てていきたいと考えています。

3, 4つ目は、「質の高い研究、質の高い発表」です。「論文の量（数）」が「使いやすい評価軸」であることは認めますが、必ずしも「論文の量」のみが重要ではないとも思います。それは先述した、生態系における「Trade Off」の関係と同じように、「量」を重視すると、潜在的に、その対にある「質」が犠牲になってしまうリスクが高まるからです。量を重視するあまり、結果がほとんどわかっているような「後追いのケーススタディ」を展開し、本質にせまる「新しい研究、新しい議論を回避する」ということが、サイエンスを前進させる原動力には、なかなかならない（かな？）と思います。個々人の力には限界があります。しかし、研究チームを作り、お互いの長所を活かし、短所を補う、まさに「Give & Take」を基にして、多くの議論を重ねながら、研究を展開することができれば、,, 例え、まずは研究の初期段階で、やりたい研究、やらねばならない研究、やりたくない研究、やる必要のない研究などを判別し、どこまでお金と労力をつぎ込むのか（=どのくらい丁寧にやるのか、どの程度まで雑でも許されるのか）を決定すること,,, から始まり、そして、最終的には、質の高い研究や発表（Output）に繋がると思っています。

最後に、私の「研究」兼「趣味」は、「海釣り」と「小さな海水魚の飼育」です。研究面では、例えば、釣った魚や飼育した魚に含まれるアミ

ノ酸の窒素同位体比 ($^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$) を測定し、沿岸域の生態系構造を明らかにし、捕食-被食の連続で行われる物質循環に「普遍性」と「ゆらぎ」をもたらすメカニズムを調べています。趣味としての、魚との1対1の真剣勝負（美味しい魚ほど釣れない！）や、難飼育性の魚（キレイでカワイイ魚ほど飼育できない！）を飼育することへの挑戦には、研究と匹敵する「おもしろさ」があります。海水の温度やアンモニア濃度の深度分布を測り、カメラを投入し、胃内容物の同定と定量から同位体比測定までも使っても、釣れない魚は全く釣れませんし、どんなに手をかけても、「人に飼育されるくらいなら餓死を選ぶ！」という高貴な魚達に対して、「お願いだから、ご飯を食べてね,, , そうしないと、飼育実験（controlled feeding experiment）にならないから,, ,」と日々、格闘しています。しかし、事「小さな海水魚の飼育」に関しては、その大変さとは裏腹に、キュートな魚達に囲まれている研究室は、癒しの空間を提供してくれます（魚の運命,, , いずれは、一匹も残らず同位体比測定へ,, , さえ考えなければ、ですが・・・）。そのような癒しが必要な時には（もちろん、有機化合物の同位体比の可能性に触れたい！皆で議論がしたい！などの時も）、是非、北大・低温研の我々の研究室に遊びにいらして下さい。その際は、「前回来たときにいた、あの〇〇色の魚が、いないみたいだけど？」は禁句です。そして、釣りのお誘いもいつでも大歓迎です。

挨拶が長くなりました。皆様、これからも、どうぞよろしく願いいたします。

力石

力石 嘉人（チカライシ ヨシト）

北海道大学 教授
低温科学研究所 水・物質循環部門
同位体物質循環分野
〒060-0819 札幌市北区北19条西8丁目
(TEL) 011-706-5472 (直通)
(E-mail) ychikaraishi_AT_lowtem.hokudai.ac.jp
(URL) <http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/isophysiologist/>

兼務：国立研究開発法人 海洋研究開発機構
生物地球化学研究分野 招聘上席研究員
〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町 2-15



写真. Wisconsin 大学 Madison 校の Shawn A. Steffan 助教と、白熱した議論をしているところの
写真, 2017.6.12, Wisconsin 州 Madison にて撮影

Overseas Report

今回は、東大の伊佐治雄太さんに東大で実施された海外巡検の様子を報告して頂きました。

シチリア島海外巡検報告

伊佐治雄太（東京大学 大気海洋研究所）

今 2016 年 9 月下旬、東京大学理学部地球惑星環境学科のシチリア島海外巡検にティーチングアシスタントとして参加させていただいた。私は高塩環境の生物相・生物地球化学循環を研究テーマとしており、2015 年にもシチリア島でサンプリングを行っている。今回の巡検は、私がこれまで学んできたことや明らかにしてきたことを学部生に伝え、最新の分析結果を現地の共同研究者と議論し、追加のサンプリングを行うなど多くの目的があり、盛りだくさんの巡検になりそうだった。

残暑の厳しい東京を発ちローマ経由で 16 時間、午後 10 時頃にパレルモ空港に到着した。その日はパレルモ市内のホテルに宿泊し、次の日にチャーターバスで島西部の町トラパニへと向かった。道中では、葡萄畑やオリーブ畑をあちこちで見ることができる。これらの作物は、地中海と聞くと誰もが思い浮かべる地中海性気候の代表的な作物である。また、夏季に乾燥する地中海性気候は、塩田を利用した塩づくりに適した気候でもある。私たちは最初の二日間、好塩性生物の研究を長年行っている Andrea Santulli 博士（パレルモ大学）の案内のもと、トラパニの塩田に析出する石膏($\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$)や岩塩(NaCl)などの蒸発岩や、微生物マットの観察を行った。

高塩環境と言うと、ごく限られた生物のみが細々と暮らす世界と思われがちだ。しかし、実際に塩田を訪れるとそのイメージは完全に覆される。海水が 2-10 倍濃縮された高塩水が貯まった区画の底部は、一面微生物マットで覆われているのである。マットは上から黄色、緑色、紫色、黒色の層を成しており、光合成生物（藻類、シアノバクテリア、紅色硫黄細菌）、化学合成細菌（硫黄酸化細菌、硫酸還元菌、メタン菌）、従属栄養生物など多種多様な生物が生息している（写真 1）。そこは、酸素が豊富で光に満ちたマット表層からわずか 1 cm 潜ると硫化水素で満たされ光が届かない環境が広がっている、有機地球化学的にも極めて興味深い場なのである。私は、この塩田微生物マット内の炭素・窒素循環を解明することを目的に、光合成生物の作るクロロフィル色素の炭素・窒素安定同位体比を利用した研究を行っている。今回、この研究の内

容を学部生に紹介する場を与えていただいた。学生の関心を引くような話ができただけでなく自分の未熟さを痛感したが、自分の研究を誰にでも分かるように説明するという体験はとても勉強になった。

次の二日間は、島の南西部に位置するアグリジェントに滞在した。アグリジェントでは、今回の巡検の全期間にわたり案内役を引き受けてくださった Stefano Lugli 教授（モデナ・レッジョ・エミリア大学）による案内の下、レアルモンテ鉱山という巨大な岩塩鉱山を見学した。この岩塩は、およそ 597-533 万年前にかけて地中海海水の蒸発が進み、地中海のほぼ全域に最大層厚 2 km の蒸発岩が堆積した地中海塩分危機と呼ばれるイベントの産物である。バスがぎりぎり入る鉱山入り口から地下へと下り採掘場に出ると、白黒の縞模様の壁に囲まれた巨大な空間に出た（写真 2）。白色層は乾期（夏季）に析出した岩塩、黒色層は雨期（冬季）に流れ込んだ粘土である。塩田で観察した岩塩の産状を 500 万年以上前の堆積物にも見いだすことができることに強く感銘を受けた。岩塩は海水が 10 倍程度濃縮されると析出するが、この鉱山には 70 倍以上濃縮されないと析出しない K-Mg 塩鉱物の層も存在する。この極限環境下の生物活動を明らかにすべく行っているバイオマーカー分析の結果を、Lugli 教授と議論できたのも大きな収穫であった。

このほかにも、紀元前 6 世紀頃にアグリジェントで築かれた神殿の谷を現地の考古学者の解説付きで見学したり、火山学者の Carmelo Ferlito 博士（カタニーア大学）と共にヨーロッパ最大の活火山であるエトナ山に登山したりと、盛りだくさんであったという間の 6 日間だった。日本の大学がシチリア島で巡検を行ったのは今回が初めてだったらしく、現地の新聞社の取材を受けるといった面白い経験もした。様々な分野の話を実地で専門家から聞くことができたことは、最近自分の研究分野の勉強ばかりをしていた私にとって非常にいい刺激になった。今回得られた知見や経験を糧に今後さらに研究に励みたい。



写真1 塩田の底に析出した石膏中の微生物マット。



写真2 レアルモンテ鉱山に見られる地中海塩分危機時に堆積した岩塩-粘土互層。

Announcement

最近、論文投稿数が減少しています。

ROG 33 巻へ論文を投稿しましょう！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、冊子の発行および web サイトに公開しております。ROG32 巻(Vol. 32) 1~2 号(Nos. 1-2)は、昨年 12 月に発行され、総説 1 編、技術論文 2 編の計 3 編が掲載されました。表紙は、掲載された東北大 齊藤諒介博士の総説に関連したデザインになりました。2017 年巻である ROG33 巻(Vol. 33)は、1 号(No. 1)は 2017 年 9 月頃、2 号(No. 2)は 2017 年 12 月頃に web 公開する予定で進めております。冊子体は昨年同様に 12 月頃の発行を予定しております。昨年から論文投稿数の減少が目立ってきているように感じられます。皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。

ROG の論文のカテゴリーはこれまで通り、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)です。また、新しいカテゴリーである「議論(Discussion)」も加えるべく、編集委員会で検討しております。有機地球化学会シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表な

ども歓迎いたします。詳細は、ROG32 巻の巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROG は研究分野・領域のボトムアップをより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。様々なアイデア・企画を編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

※電子投稿アドレスが変わりました

PDF 添付ファイルによる電子投稿：

sawadak@sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目
北海道大学大学院 理学研究院 地球惑星科学部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

年会費納入のお願い

会員の皆様には日頃よりご支援いただき、誠にありがとうございます。

2017年1月より新しい会計年度になります。すみやかな年会費の納入にご協力をいただけますよう、よろしくお願い致します。

年会費： 正会員 2,000 円

学生会員 1,000 円

振込み先： 郵便振替口座 00110-7-76406

(名義人：日本有機地球化学会)

所属機関より納入するなど会員登録名以外でお振込みの方は、事務局財務担当の高野 (takano(a)jamstec.go.jp) までお知らせください。

※学生会員の方へ

これまで学生会員の方で、卒業・修了された時は、事務局 (steering(a)ogeochem.jp) までお知らせください。本会の会計年度は1月より始まりますので、この3月末に卒業・修了される方は、学生会員の年会費で結構です。次年度より正会員の年会費の納入をお願いします。なお、卒業・修了後の連絡先を事務局 (steering(a)ogeochem.jp) まで忘れずに届けてください。

※異動・転居された方へ

職場や自宅が変わられた方は、会員管理と会誌郵送のために、新しい住所、電話番号、E-mail アドレス 等を事務局 (steering(a)ogeochem.jp) までご連絡下さい。
※メールアドレスの(a)をアットマーク@に変えて下さい。

編集後記：

Peopleにご寄稿していただける方, またこの方に書いてもらいたいというリクエストをお待ちしております。(大)

今回は編集作業を担当させて頂きました。(高)

暑き季節になってきました。皆様お体に気をつけてお仕事なさってください。(金)

発行責任者 日本有機地球化学会会長 鈴木 德行
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学大学院 理学研究院 地球惑星科学部門 地球惑星システム科学分野
Phone&Fax: 011-706-2730

日本有機地球化学会事務局
〒107-6332 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー
国際石油開発帝石株式会社 技術本部 評価技術ユニット内
事務局長 稲場 土誌典
Phone: 03-5572-0263, Fax: 03-5572-0269
e-mail: office@ogeochem.jp
ゆうちょ銀行口座 00110-7-76406 (名義人 日本有機地球化学会)

編集者 大場 康弘(北海道大学低温科学研究所) 金子 雅紀(産業技術総合研究所) 高橋 聡(東京大学大学院理学研究科)
e-mail: news@ogeochem.jp

有機地球化学会ニュースレターはホームページでもご覧になれます。
アドレス：<http://www.ogeochem.jp/>